

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

お坊ちゃんの リーダーシップ論

「車とか時計とか、本当に興味ないんだよね。車は父親のお下がりだし」

「お下がりでメルセデスなんて他人が聞いたら怒るよ。そのお坊ちゃん感覚が、とちほんのいい所だけど」

経営者的心労は半端でなく、日々決断を迫られる事案は山ほどあり、熟睡できぬ夜が続けば、医者の処方した睡眠剤に頼ることもあります。それでも僕たち二代目は自覚している以上に、お坊ちゃんの

は彼らになれないし、彼らも僕たちにはなれない。持つて生まれた立場、会社が存続している限り「一生付いて回る宿命がある。それが僕ら「二代目」であり「お坊ちゃん育ち」なのでしょう。

とある深夜、取引先のA君からの携帯が鳴りました。弊社との仕事でミスをした、その謝罪の電話でした。

さは「人に優しくなれる余裕」かもしません。

最近、リーダー格の人物も、よく人前で涙を流します。著名なコンサルタントは「部下とともに涙し、喜怒哀楽を共有するのも大事なりーダーシップ」だと言いますが、はたして僕たちに当てはまるでしょうか。強烈な牽引力のある創業者とは違う、二代目なりのリーダーシップ理論があるはずです。

変わらなきやいけないんです
『僕が、自分が』という、自責の目立つ
言葉が引っ掛かりました。

何も変わらないよ」

その途端、堰を切ったように彼は号泣し始めたのです。僕はA君の雇用主ではないし、彼の会社の内情を探る野次馬根性もなく、「ウツ、ウツ」という嗚咽を黙つて聞くのみでした。

「とメスを入れて切り開き、ラクにしてあげることかも知れません。彼らの流す涙は、本音が噴き出たしるしでしょう。自ら涙を流して情の深さをアピールするより、人が心を開いてくれる懐の深い人間でありたいと、あらためて思いました。」

部分があるのでしよう。余談ですが東京で学生時代を過ごした僕のあだ名は「とちぼん」、栃木から来たボンボンという意味です。

皆さんも同じだと思いますが、会社で

ちらから「○○を命ずる」と言うよりも、

自分から「〇〇をやります」という社員を

歓迎するのです。しかし限度はある。「社

長をやります」と要望されても、可能性はゼロではないが非現実的です。僕たち

「でも、社長の涙は見たことないですね」
はありません。

お坊ちゃん育ちの良



さおとめ・よしげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと、2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在8店舗を経営。1965年生まれ。

AJ